



第5回死生懇話会 会議録

日 時：2025年3月23日（日）

15時00分～16時45分

会 場：滋賀県庁新館7階大会議室

滋賀県では、誰もが避けられない「死」について真正面から考えることで、限りある「生」をより一層充実させる施策につなげる契機とするために、様々なお立場やご専門の方からなる「死生懇話会」を2020年12月2日に設置しました。

この懇話会は、どう生きるのが良いかといった価値観を押し付けるものでは決してなく、「死」や「生」の捉え方等についての様々な考え方や取組の情報を発信していくことで、それに触れた方に、それぞれのアンテナにひっかかる“何か”を見つけていただき、より豊かに生きるヒントを見つけていただきたいとの思いで開催するものです。

また、今後、多死社会を迎える中で、行政の役割や行政へのニーズもこれまでとは変わってくるのではないかと考え、「死」を捉えた「生」のあり方について、皆さんと議論を深め、様々な視点からご意見や情報をいただくことで、多死社会において行政ができること、人生100年時代に行政に求められることが何かを探っていきたいと考えています。

この冊子はその「第5回死生懇話会」の内容を会議録としてまとめたものです。



【第5回死生懇話会 出演者】

打本 弘祐さん（死生懇話会委員）

龍谷大学農学部生命科学科 准教授

越智 眞一さん（死生懇話会委員）

一般社団法人 滋賀県医師会 前会長

楠神 渉さん（死生懇話会委員）

滋賀県介護支援専門員連絡協議会 副会長

ミウラ ユウさん（死生懇話会委員）

NPO 法人好きと生きる 理事

一般社団法人こどもエンターテインメント 代表理事

上田 洋平さん（ファシリテーター）

滋賀県立大学地域共生センター 特任講師

三日月 大造

滋賀県知事



〔15時00分 開会〕

○事務局(滋賀県企画調整課 山田)

大変お待たせいたしました。お時間になりましたので、第5回死生懇話会を始めさせていただきます。

私は、企画調整課の山田と申します。よろしく願いいたします。

この死生懇話会は、誰もが避けられない死と向き合い、そこからより豊かに生きるためのヒントを得ようということで、こういった根源的なテーマについて多くの方が考え、語る機会を作ってきたものです。そういった場に様々なお立場の方にご参画いただきながら、これまで4回開催してまいりました。本日はその第5回目として開催させていただくものです。

はじめに、本日の登壇者の皆様をご紹介します。

死生懇話会委員の

・龍谷大学農学部生命科学科 准教授

打本弘祐さんです。

・滋賀県介護支援専門員連絡協議会
副会長 楠神渉さんです。

・NPO 法人好きと生きる 理事、一般社
団法人こどもエンターテイメント 代表理
事 ミウラ ユウさんです。

そして、死生懇話会のファシリテーターを務めていただいています、滋賀県立大学地域共生センター 特任講師 上田洋平さんです。

死生懇話会委員の越智眞一さんは、都合により遅れているということですので、先に進めさせていただきます。また、滋賀県知事の三日月大造も前の公務で遅れているということですので、到着次第、ご発言させていただきます。

なお、死生懇話会委員の関西学院大学人間福祉学部人間学科 教授 藤井美和さんは現在、アメリカのボストンにおいて、死生学の研究活動に従事されておりまして、今回はご欠席のご連絡をいただいておりますので、ご報告させていただきます。

まず、皆さんにご案内です。この死生懇話会の取り組みをまとめた本を、この2月に出版いたしました。職員目線の一人称書きということで、少し珍しい形で書かせていただいています。この場でお買い求めいただくことはできないのですが、お配りしている資料の2次元コードからオンラインでもご購入いただけます。また、近所の書店に置いてある場合もありますので、近くの本屋さんにお問い合わせいただいたら置き等

していただけたと思います。ぜひお買い求めいただければと思っております。

本日、会場・オンラインでたくさんの方にご聴講いただいております。せっかくの機会ですので、ご聴講の皆様からのご意見・ご質問・ご感想などをいただければと思っております。

時間の都合上、全てのコメントを紹介するのは難しいんですが、後半にかけてご紹介させていただきながら議論を展開していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

まず、今回ご欠席の藤井さんのコメントをお預かりしていたしておりますので、ファシリテーターの上田さんからご紹介させていただければと思います。よろしくお願いいたします。

○上田 洋平さん



はい。改めまして、皆さんこんにちは。第5回の死生懇話会ということで、今回もファシリテーターを務めさせていただきます、上田でございます。よろしくお願いいたします。

この懇話会、いろんなハプニングもありました。今日もまた知事が前のご公務の都合でまだご到着でないということで、死生懇話会らしいスタートになりました(笑)。

2020年から始まりましたこの懇話会も、いよいよ今回で一つの区切りということであります。委員の皆さんも聴講頂いている皆さんも、一度も死んだ覚えはない。そういう死の素人が集まっています(笑)。それで死から見た生ということで、いろいろ議論をしてきたところであります。今日は一つのまとめということで進めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

今日のもう一人の主役は、県庁で本を書

かれた企画調整課の担当の方なんです。本が出版されたということもありまして、この内容も踏まえて、感想も交えながら、委員の皆さんと話を進めていきたいと思います。

慣例に従って、この懇話会では「さん」付けで皆さん呼ばさせていただきます。三日月さんには、この後藤井さんのメッセージをご紹介した後に、挨拶いただきたいと思います。

では、私の方で代読をいたします。これまでの回を振り返るような中身にもなっておりますから、ぜひ思い出していただきながら、聞いていただければと思います。第5回死生懇話会ご欠席でありますのでメッセージということで、関西学院大学の藤井美和先生であります。

○藤井 美和さん(代読:上田 洋平さん)

皆さん、こんにちは。藤井美和です。最後の死生懇話会に参加することができず、大変残念ですが、アメリカ・ボストンから愛のメッセージを送らせていただきます。

『えっ！死ぬとか生きるとか知事命令？』—この本のタイトル通り、「えっ！」の出発から5年。行政が、県民の皆さんと一緒に「生きること死ぬこと」について真正面から向き

合った「死生懇話会」。果たしてこのような試みが、過去にあったでしょうか？

私がこの取組の担当者である企画調整課 森さんからメールをいただいたのは、2020年10月5日。死生懇話会の設立趣旨の文書にこのような文言がありました。『県行政としても、「死」を真正面から考えることで、限りある「生」をより一層充実させる施策につなげる契機とするため、有識者からなる「死生懇話会(仮称)」を設置することとする』。この部分は太字になっており、さらに下線が引かれていました。それを見た時、行政が生と死について取り組む本気度を見た気がしました。そして、その驚くべき出発点は、この本で初めて知りました。

私が関西学院大学で死生学を教え始めたのは1999年、今から26年前のことです。死について語るハードルの高さは多少変化したとはいえ、当時も今も大きく変わっていないように感じます。それだけに、行政が取り組む「死生懇話会」は意外であり、私にとっては魅力的でした。

Zoomで初めてお目にかかった時の森さんたちの熱意から、この方々なら、きっとやってくださる！という強い印象を受けたことを思い出します。そして森さんからこの

担当を引き継いだ若い山田さんの意気込みもまた素晴らしいものでした。

行政は、私たちの生活と人生を支える役割を担っています。高齢の方々、病気や障害を持つ方々、いじめ、虐待、家族関係に苦しむ子どもたち、路上で生活する人、病気や災害で愛する人を失くし悲嘆の中にある人、貧困・子育て・介護で生活に困難を感じる人、何だかわからないけれど生きる意味が見いだせない人…行政に関わる人たちは、みんな自分の人生を背負って生きています。

「生きづらさから死を思う」人もいれば、「死に直面して生き方を考える」人もいます。つまり、生と死は別のものではなく、むしろ一つに繋がっています。その意味で、死に向き合うことは、生きるための第一歩だと言えるでしょう。

現代社会の価値観は、能力や生産性を重んじ、私たちの「在りのまま」を OK としてくれません。それが多くの「生きづらさ」を生み出しています。しかし、社会の価値観は、実は、社会の一員である私たちの価値観が反映されたものなのです。私たち自身が変わらない限り、社会は変わりません。「生きづらい社会を変えよう」ではなく、「私たち

が変わろう」とすることで、社会の価値観は変わっていく—この視点に立てば、「在りのまま」を OK とする社会は実現できると確信しています。

死生懇話会は、私たち自身を振り返り、社会で起こる事柄に目を向け、いのちに向き合うことで、どう生きるかについて考える会であったと思います。このような会に関わらせていただきましたことに心からお礼申し上げます。

最後に、死生懇話会でつながった皆様へのメッセージです。

本の冒頭にも書かれていますが、2020 年1月6日の知事命令(?)こそが、死生懇話会の生まれた瞬間でした。

三日月知事の深い思いと革新的リーダーシップ、これがなければこの子は生まれませんでした。

生まれたてホヤホヤの死生懇話会は、企画第二係の方々や WG の皆様の真摯な子育てによって、今や 5 歳になりました。ゲストの方々、インタビューに応じてくださった方々、たくさんの支えがありました。私たち委員も子育てに関わらせていただきましたが、私自身は、むしろ、たくさん学ばせてい

ただいたように思います。さらに、あちこち自由に動き回る子ども（死生懇話会委員）の声を見事にコーディネートしてくださった上田さん、本当にお疲れさまでした。

そして何より、死生懇話会に関心をもって集まってきてくださった県民の皆さん。皆さんがおられなかったら、この会の意味はありませんでした。

この本を読んで嬉しかったのは、死生懇話会をリードしてこられた三日月知事、森さん、山田さん、それぞれが、ご自身の中に見出した変化を語っておられたことです。おそらくこの会に参加した人は皆、新しい発見や疑問を持たれたことでしょう。それこそが、第一歩！

「死に向き合い、いかに生きるか」ーこの根源的テーマに取り組んだ滋賀県・県民皆様の思いが、全国に広がっていくことを心から祈ります。

2025年3月23日

春、待ち遠しい Boston にて

藤井美和

○上田 洋平さん

上田代読でありました。藤井さんに拍手を。(拍手)

なんかもうこれで終わっても良さそうな

んですが。いま、お聞きいただきながら、これまで5回のことを思い返していただいたところかと思います。こんな素晴らしいメッセージをいただいたところからスタートしていきたいと思います。藤井さんのメッセージを受けてのご感想なんかも交えていただいたらと思います。

では、三日月さん。駆けつけていただき、今の藤井さんのメッセージをお聞きいただいて、落ち着かれたところかと思います。改めまして、三日月さんから開会にあたってのご挨拶を一言頂戴したいと思います。お願いします。

○三日月大造



ご参加いただく皆さん、またご聴講いただく皆さんありがとうございます。滋賀県知事の三日月大造です。

遅参をいたしまして申し訳ございません。

今日は別の会合がありました。実は 94 歳の方の会合でしたので、「もう生きている間に、今日が最後かもしれん。」って言われたので、最後まで会に参加してからこちらに参りました。遅参をいたしまして申し訳ございません。

死生懇話会をやって、いろんなことを考えるようになったからかもしれませんが、一つ一つの出会いとか、その場での語らいとかその時間っていうのをできる限り大切にしなければならないと思うようになりました。知事という公務をやらせていただきますと、「公務によりこれで退席をされます。」というご案内、アナウンスもたくさんご配慮でいただくことがあります。もちろん、そういうご配慮に甘えて動くこともあるんですが、一つ一つ、ひとり一人との出会いや語らいを大事にしようと思ったことも、この死生懇話会の一つの私の変化なのかもしれません。

また、後ほども振り返りがあるのかもしれませんが、この本が出まして『えっ！死ぬとか生きるとか知事命令？』っていう。「三日月パワハラか！？」っていうことも言われたんですけど、読んでいただければお分かりの通り、私からの問いかけ、投げかけ、問題提起に対して、職員もまた多くの皆様方も、一緒に考えようということで、ご協力やご示

唆いただいたこの間の取組について、一定とりまとめさせていただきました。これから多くの方々と書いてあること、また私たちが悩んでいることについて、一緒に共有して、また深く広く考えていくきっかけになればなというふうに思っているところであります。

この間ですね、ミウラさんや上田さんや打本さんや楠神さんや後ほどお越しいたきます越智さんや、そして多くの方々に、「一緒に考えようよ。ありのままでいいんじゃないの。そして、それぞれ抱えている悩みを共有して、どうやったら乗り越えていけるのかっていうのを考えていけたらいいね。」ということや、あるいはそういう悩みばかりじゃなく、「こうすれば楽しく思えるんじゃないの。」とかそういった気づきもたくさんいただきましたので、そのことに感謝申し上げて、後ほど皆さんから振り返りいただくこともこれからの繋げていきたいというふうに考えております。

最近、「子ども・子ども・子ども」ということで、「子どものために、子どもとともにつくる県政」というのを大事にさせていただいています。ぜひ来年度以降ですね、「子ども・子ども・子ども」というのも大事にしつつ、死生懇話会をやったからというわけではないのかもしれませんが、老いとか病との付き合いとか、死との向き合いとか、さらにこ

ういった根源的なことに寄り添える滋賀県政を皆さんと一緒に作っていきたくらいな
 と思っているところであります。ぜひ、ご参
 加いただいている皆さん、ご聴講いただ
 いている皆さん方から、せっかくだからこう
 いったことにもっと取り組んだらどうだとい
 うようなことも様々ご意見等をいただければ
 ありがたいなと思っております。

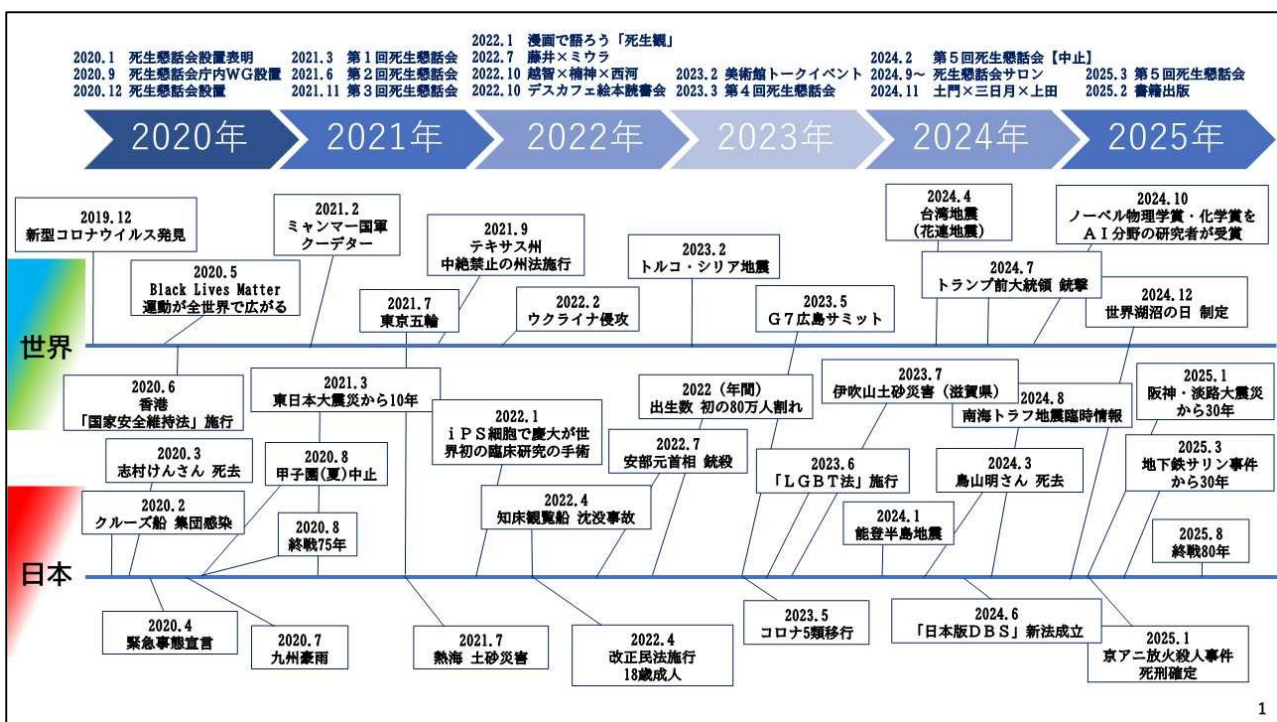
今日もどうぞよろしくお願いいたします。
 ありがとうございます。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。それでは進
 めてまいりたいと思います。いつもは、ゲス
 トスピーカーをお招きして、冒頭にご講演を
 いただいて、それを踏まえて皆で議論をし

ていくということになっているんですが、今
 回はまとめというか一つの区切りであり、ま
 た、この本ができたということでもあります
 ので、これまでの懇話会での議論を振り返
 りながら、できるだけ委員の皆さんにこの間
 の様々な思い等について、あるいはこの懇
 話会の意義といったものについて、お話を
 いただくということにしていきたいと思ひ
 ます。

懇話会設置以来の世相を振り返るため
 の資料にしたいと思ひまして、年表のような
 ものを用意いたしました。これは、別に何か
 基準に基づいて作ったというものではなく
 て、この間の出来事のなかで自然に思ひ浮
 かんだものを書き出してみたということど
 す。



2020 年 1 月に死生懇話会設置の表明がされ、それからいろいろ準備がありました。死生懇話会に関する庁内ワーキングというのは、実はこの懇話会では、委員の皆さんと企画第二係の皆さんだけではなくて、全庁いろんな部署に所属する職員の皆さんが集まって、ワーキンググループを作って、それぞれの担当課とか、それぞれの職員の皆さんの関心を踏まえて、死生についての学びとか議論、情報共有をしました。そういうワーキンググループの設置なんかもあり、ようやく 12 月に死生懇話会が設置されました。第1回が 2021 年ということでありました。

実は、このときにコロナがじわりじわりと広がっていました。クルーズ船の集団感染。その頃はちょっとどこか、まだのんきに構えていたところに、志村けんさん等の著名人が亡くなるというようなことがあって、これは本当に怖いウイルスなんだということを痛感して、そこから4月以降ソーシャルディスタンスということで行動制限がかけられたりという。このような、まさにコロナが始まるタイミングというのが、第 1 回目ということになりました。そういう何となく不穏な空気の中で、今思えばまさに時代の転換点の中で、この懇話会は時代の要請であるかのように、我々からすればそう受け取れるほ

どのタイミングで始まったということです。後でちょっと見せますが、このとき皆さんからキーワードをひとり一人いただいて、委員の皆さんでお話をしたということでもあります。

また、2回目以降はゲストの方をお招きしながら進めていきました。例えば2回目は広井良典先生。当時、京都大学こころの未来研究センターの先生でいらっしゃいましたが、死生観の空洞化やその再構築というような話をいただきました。今、死生観というものが空洞化しているんじゃないか、それをどのように再構築するのか。しかも、滋賀ならではのというか滋賀だからこそ、自然とともに、自然との関わりを通して死生観を再構築していこうじゃないかという話がありました。こんなふうに喋っていると、どんどん時間がなくなっていくますが、3回目は、野々山さん。また、懇話会の合間には、いろんな趣向を凝らしまして、漫画をテーマに「漫画に見る死生観」という形でトークを試みたり。あるいは、毎回の懇話会の時間だけでは、委員の先生方の話が聞ききれない、もっともっとお話をしたい、もっともっと聞きたいという声に応えるために、トークライブということで、少人数の委員の皆さんに来ていただいてゆったりというのも重ねていきました。さらに、美術館で絵画を見ながら、「アートの中に死生を見る」というトーク

ライブもやりました。第4回、この直近の懇話会としては、写真家の國森さんをお招きして、写真を見ながらのトークもやりました。2023 年度は、もっと県民の皆さんの現場に出かけてお話ししようよ、県民の皆さん同士の語らいもしていこうじゃないかということで、出張する形で懇話会サロンを展開してきたところであります。そんなことで、サロンやトークイベント、懇話会いろいろな形で、展開をしてきたところであります。残念ながら、第5回目、去年2月に予定されていたものは様々な事情がありまして中止ということになってしまいました。その代わりといたしますか、5月からは先ほど紹介のあった、これまでの経緯を担当者の目線でまとめられた稀有な書籍。よくこんなの出版できたな、出すのを許したなと思いますけど、出されたという。お買い求めいただくと見ていただけるんですが、コロナ禍には、担当の人が上司にこれを説明しに行ったら、何かちょっと嫌そうな顔をされたみたいなそんなことまで全部書いてあるんですね。そういうのを乗り越えてこの懇話会。県庁の中でも賛否があった。死生に関して、公の行政が向き合うということですか、それを取り上げて関わるというのは、「いいことだ。」という意見も同じ県庁の中であれば、「いやいや、それは抑制的であるべきだ。」とい

う声もあったわけですね。そういう賛否の中で、どう展開してきたかっていうのを本当に生の声、ありのまま書かれた本ができたということでもあります。そして、今日に至るという形であります

ちょっと見ながらですね、またこれからこの後皆さんに振っていきますけれども、この間いろいろありました。コロナがありましたし、震災 10 年とか緊急事態宣言もありました。あるいは、元首相が殺害されてしまうという恐るべきことも起こりました。資料の上が世界、下が日本あるいは滋賀ということです。2022 年、現代においてこんなことが、というロシアによるウクライナ侵攻、あるいはその後も紛争や衝突が絶えず、2023 年には中東で悲惨な事態が発生しております。そういうことが起こったり、AI が思いもよらぬ台頭をしてきた。Zoom でやっているのも、コロナの中で展開してきたということになります。直近では、第2次トランプ政権。これもいろいろな分断が国の中で起こるのを我々は見ているということではありますが、国内でも様々なことがありました。滋賀県では、伊吹山で大雨による土砂災害が起こり、しかも同じ月に3回も起こるみたいな。自然の災害と我々の暮らしが直結していて、それはまた獣害とも気候のこととも全て繋がって、我々の生命が生きること死ぬことが

繋がっているということを、このような出来事を通してまざまざと思い知るようなことになりました。また、能登の震災。東日本大震災があつて、もうしばらくないかと思つたら1000年ぐらいの単位の大きな地震が能登であつた。やはり我々はそういう大きな自然の動向の上に生きている、こういうことも感じさせられる出来事があつたというように、なことでもあります。こういう様々な事件や出来事の中で、懇話会を進めてきたということでもあります。

登壇者の皆さんに後ほど伺いしようと思います

- ① 死生懇話会に携わつてきて変化したと感ずること
- ② 「死」「生」を巡つて考えていくべきこと、この懇話会で積み残したもの、拾いきれなかつたもの
- ③ 行政(県庁)が「死」「生」を真正面から考える意味や意義は何なのか

では、今日はここから皆さんに振つていきますが、こんなことを伺っていきます。今日さっきの藤井さんのメッセージにもありました、この懇話会ができたことで、ひょつとして、ちょっとでも世間あるいは皆さんが変わつたとか、あるいは参加された委員の皆さん自身の中に変化があつたとすれば、どういふことがあつたかみたいなことを振り返つていただきながら、まず伺ひしていこうと思います。

それから、順番を変えますが、行政(県庁)

が「死」「生」を真正面から考えることの意味・意義ということについて、これまで5回やってきた中で、あるいはサロンとかもやってきた中で思うところもお聞かせいただきたいと思います。この5回で一旦懇話会としては終わるわけですが、いろいろな形でこの経験は、引き継がれていく、バトンタッチされていくことになります。その際に、ぜひ皆さんから、この「死」「生」を巡つて今後考えていくべきこと、あるいはこの懇話会では積み残してしまつた、拾ひ切れなかつたものを、次に繋げるために伺ひたいというふうに思っています。

令和3年(2021年)3月 第1回死生懇話会

- 【打本さん】
●臨床宗教師
●死生観を養う
●死者と共に生きる
- 【越智さん】
●死の種類
●医師の仕事
●生・活
- 【三日月さん】
●生・老・病
●死(生)は誰のものなのか?
●苦楽・美醜・悲喜
- 【ミウラさん】
●共生とは?
●命を大切に
●多様性、違いを認める
- 【楠神さん】
●人生の最終章
●ACP(人生会議)
●揺れる思い
- 【藤井さん】
●死生観
●デス・エデュケーション(いのちについて考える)
●QOL(Quality of Life)とスピリチュアリティ
- 【上田さん】
●死(生)は誰のものか?
●死をわちあう
●誰が「死を殺す」のか?
- 死生懇話会で議論を深めたいキーワードを伺ひました

では、さっき「めっちゃ緊張しているので、最初に当ててほしい」と仰つていた打本さんから伺ひていきたいと思ひます。最初の質問。どんな変化とか、ご自身の中とかもありますし、最初の1回目は皆さんからキーワードを聞きましたね。打本さんは●臨床宗教師、●死生観を養う、●死者と共に生きる、こういうのを1回目のキーワードに出していただきました。付け加えるとか変える

とか、こんなのも含めてちょっとお聞かせいただきたいと思います。

○打本 弘祐さん



はい、ありがとうございます。私、本当に毎回緊張して、この場面に立っています。実はこの死生懇話会が始まると同時に、私は滋賀県に赴任してきたんですね。赴任 1 年目に死生懇話会の委員になりましたので、まさに滋賀県初心者の戸惑いとそんな人間が委員になっていいのかなと毎回緊張しておりました。

私の中で、このキーワードは本当に変わっていないところもあります。やはり、死生観を養うというところにおいては、変化とも重なるんですけれども、二つの言葉できっと言い表せられるんじゃないかなと思ってます。「広がり」ということと「深まり」ということです。「広がり」というのは、先ほど

上田先生にご紹介をいただいたように、この死生懇話会は、死ということに関して、幅広いテーマで議論してきたと思います。委員の方々も多彩な方が集まってきましたし、しかも結構フリートークで話せるのでいろんな発言がポンポン出てくるということで、大変面白かったなと思います。

先ほど、上田先生。いや、上田“さん”と言わなきゃいけない。これは非常に大事な姿勢だと思うんですけども、死生観の話をするときにお互いが上下のない形で、やはりみんな「死」というのは誰にでも平等ですよ。逃げられない、だからこそ同じ立場で「さん」付けっていうのは非常に大切なことというふうに思います。まさにこれが県庁でやるときの意義なのかなというふうにもちらっと思います。

「広がり」という意味では、私が参加させていただいただけでも美術館の中であったりとか、それからバーチャルリアリティ時代における吊いっていうのは一体何なのか、バーチャルリアリティで亡くなった人を再現する、それは本当に死んでいるという状態なのかどうかとか。今まで考えたことがなかったようなこと、それを改めて前に出されることによって、自分がどう考えるのかっていうことを話させていただきました。そういった意味では、私は仏教者ですので仏教とい

う立場を持っていますけれども、様々なテーマを与えられて広げられていく中で、やっぱり仏教者として、あるいは自分の中の死生観というものが深まってきた。まさにこれが養うということになっていくんじゃないかなと思いました。

先ほど、藤井先生の愛のあるメッセージの中にもありましたけれども、自分がたくさん学ばせていただいたという言葉。これまさに私も一緒に、この死生懇話会の委員をやっている、委員だから滋賀県社会福祉協議会のレイカディア大学さんの講義に講師として招いていただいたということがありました。その中で、私が講義するんですけども、彦根のキャンパスの方と草津のキャンパスの方にいろいろとお伺いをしてお聞きをすると、やはり同じ滋賀県でも彦根の方の伝統であるとか死生観また地域の行事というものも違うし、またそれは草津の方は「いやいや、私たちはやっていますよ」というような違いがあるということを私は滋賀県初心者ですので、教えていただいたんですね。そうしますと、地域文化の中に根付いている死生観というものは、それはまさに広井さんが言っていた滋賀県ならではの死生観。それというものを実は私自身が知りましたし、語っている方々の中で再構築されて、立ち上がってきているんじゃないか

なというふうに思ったんですね。これも実は広井さんの講演の中で、琵琶湖の漁師の方の死生観っていうのを取り上げられていたんですね。あのときに、広井さんは琵琶湖の漁師さんが、私が死んだら琵琶湖に帰るんだっていう話をしてくださった。そのあと、私が広井さんの本をいろいろ読んだら、実は上田さんのお取り組みの中でお話があってそれを広井さんが紹介していらっやいました。私、打本自身からすると、琵琶湖に帰るという死生観っていうのは、ちょっと衝撃的で今でも印象深いですけども、そういった死生観っていうのを初めて知りました。いろいろと私も調べていきますと、琵琶湖というものの自体が、実は竹生島を中心とした弁財天様のビワの形をしているんだと。私の文脈でいきますと、琵琶湖というのも「淡海」という「海」でありますので、その世界に帰ってくると。そうすると海上浄土とか、海中浄土と言われるいわゆる“あの世”観ですね。そういったものからの言葉だったのかなと、私自身はそういうふうに捉え直すこともできました。これは死生懇話会をやったりする湖国と言われる滋賀県ならではの死生観だったんじゃないかなと今思ってるんですね。先ほど楠神さんとも喋ってんですけど、滋賀県に赴任させてもらって、私滋賀県に来てとても幸せだなと思っ

ておりまして、こんなことを学べる機会というのはそうそうありませんので、湖国文化ならではの滋賀県ならではの死生観というもの本当に深まってきた5年間だったなというふうに思います。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。今出していただいたんで、ちょっと補足しますと、広井さんの本の中に琵琶湖の周りで生きる人々の死生観ということで、僕が広井さんに昔喋ったことが取り上げられています。もうお亡くなりになったんですが、ある方が言われた「私はここで生まれ、ここで育ち、ここの食べ物を食べて、ここの人々の間でこんな役割を担い、あるいは期待をされ期待をし、そしてもう 90 歳を超えてやがてここで死ぬでしょう。だけど死んだら終わりじゃなくて、お盆と正月には子どもや孫に迎えてもらい、そしてご仏壇でしばらく過ごして、そしてまたお盆が終われば帰っていくんだ。ここが私の在所です。」と、こうおっしゃるわけですね。在所っていうのは、ここが私の村というのが普通の意味なんですけど、そのおじいさんがおっしゃった在所っていうのは体も心も魂もここにあるという、そういう実感の伴った在所なんだなっていうふうな話をしたのを本に書いてくださって、それを読まれ

たということですね。滋賀県のある地域では、お盆になると山裾のお墓にご先祖を迎えに行って、提灯に火を灯してこれでご先祖が来たと。そして、ご仏壇に迎える。提灯の火を移し替えてろうそくを灯してご仏壇にご先祖が来られる。盆が終わったら、今度はまこもという植物で船を編んで、それに乗って琵琶湖の沖へお帰りになるんだと。山から来られて、琵琶湖に出られて、そしてまた山へ。そういう話があるというようなところがあって。まさに打本さんの視点、地域文化の中にある死生観。滋賀県ならではのところが逆に、死生懇話会の年に初めて滋賀にお越しになって、気づかれたという。そして、それが幸せであるということでもありますね。ありがとうございます。

続きまして楠神さん。お願いいたします。楠神さんは、●人生の最終章、●ACP(人生会議)、●揺れる思い。楠神さん、どうぞ。

令和3年(2021年)3月 第1回死生懇話会			
【打本さん】 ●臨床宗教師 ●死生観を養う ●死者と共に生きる	【越智さん】 ●死の種類 ●医師の仕事 ●生・活	死生懇話会で議論を深めたいキーワードを伺いました	
【ミウラさん】 ●共生とは？ ●命を大切に ●多様性、違いを認める	【楠神さん】 ●人生の最終章 ●ACP(人生会議) ●揺れる思い	【三日月さん】 ●生・老・病 ●死(生)は誰のものなのか？ ●苦楽・美醜・悲喜	【上田さん】 ●死(生)は誰のものか？ ●死をわちあう ●誰が「死を殺す」のか？
【藤井さん】 ●死生観 ●デス・エデュケーション(いのちについて考える) ●QOL(Quality of Life) とスピリチュアリティ			

○楠神 渉さん



私は、キーワードは最初この三つを挙げさせてもらって、ケアマネジャーをさせてもらう中で、人生の最終章にあたっては、事前にその人がどういう最期を迎えたいのか、どういう最終章を迎えたいのか、そういったことを聞くことだったり、また一度聞いたことも心が揺れ動くので、それに寄り添って伴走できたらいいなという思いでこのキーワードを挙げておりました。

今、この懇話会を終えてもキーワード自体には大きな変化はないんですが、このキーワードを考える心持ちで私の中で大きな変化があったように思います。今日藤井さんの方からメッセージをいただいておりますが、その中でも「ありのままを受け入れる、OK だ」という表現がありました。藤井さんがこの懇話会の中でおっしゃったことがすごく印象に残っていて、その人らしいとあり

のままは違うんですよ。私は、正直ほとんど同じ意味で捉えていたんですが、藤井さんがおっしゃるには、その人らしいということを追求していくと、今元気な方が年を老いたり何か病気になって、そういったことができなくなったらその人はその人らしくないのかというような問いかけをされました。そうだとしたら、ありのままっていう表現がいいんじゃないかと。ありのままを皆さんが受け入れる。そのことを聞いたとき、私ははたと思ったことがありました。

私、さっきのキーワード三つを上げる中で、ケアマネジャーをするときにその人らしく 10 人いたら 10 人違っていいんだと、その人らしく生きるための支援をどうしたらいいのか、人生の最終章においてもその人らしい最終章はどうだろうかなと思い描きながら、問いかけをしてプランを考えたりしておりました。だけど、藤井さんのお話を聞いてからは、確かにその人らしいということは大切なんだけど、その人の人生のライフストーリーを知っておくことは大切なんだけど、最後やっぱりありのまま、今現在のあなたがどのようにしたいのか、そういったことを問いかける方法が自分の中で変わってきたなと思います。また、より具体的なことでさっきのキーワードで言うと人生の最終章を迎えるにあたって、私はこういう声

かけの中で、「最期はご自宅がよろしいですか、病院がよろしいですか、それとも施設でよろしいですか。途中で変わってもいいんですが、今のお気持ちとか聞かせてもらえませんか。」みたいなことをご本人さんとか、ご家族さんに相談しながらですね、それが途中で変わってもいいですよっていうような聞き方でしてきたんですけども、この懇話会の中で生きるという話題で、生きる場所みたいな話になったときに、その具体的な場所は何番地という場所ではなくて、そういうことを受け容れられる居場所というキーワードが出てきたことがありました。だから、私はその中からちょっと問いかけ方法も自分の中で変わったなと思うのが、いきなり病院がいいですかとか施設がいいですかではなくて、最期どのように迎えたいですかから聞くようになりました。例えばお孫さんと一緒に最期を迎えたいんだということなら、お孫さんと最期を迎えるんだったら施設でもいいけますし、ご自宅でもいいけますが、どうしますかみたいな。ちょっと聞く順序が変わったんですね。だから変わったことによってご本人さんの選択肢も増えて、私もより広い範囲で聞けるようになったなというふうに思っております。

あともう一つ、この懇話会の中で印象的だったのが、看取り士の西川さんにお話し

いただいたときに、看取るって意味は何だかご存知ですかって投げかけが最初にあったと思うんですけど、私正直看取るって一つの単語のような感じで受け止めていて、それを深く考えたことはありませんでした。最終章にお付き合いすることが看取りなんだっていうそれぐらいの認識だったんですけども、西川さんがおっしゃるには、看取りっていうのは死に逝く人から何かを受け取る、「見る」と「取る」で「看取る」なんですと教えていただきました。そのとき私は普段の支援の中で感じていること、ちょっと不謹慎なんですけれども、最期看取りの場実際に自分が立ち会う中で、その空間が死を迎えたすごく悲しい場面であるのになぜかすごく温かい雰囲気を感じたり、まるで絵本の中にいるような、お孫さんが横にいて幸せだなんて感じることもありました。それは、本当に不謹慎なことだと思うんですね。死を前にしてそのような。でも、そう感じる自分があるのは事実そうであって、だから死っていうのは西川さんがおっしゃったように、一方的に悲しいだけでなく、この死を迎えて命のバトンを次の世代に繋ぐとか、お孫さんに繋ぐ。そこは悲しいだけでなく温かみのあるものが、それが受け取るものかなというふうに思って今ちょっと解釈をしております。何かそのようなこと

がこの懇話会を通して、私は感じて、実際の支援方法の中でも、問いかけの仕方とかが変えられたことはありがたく思っております。

○上田 洋平さん

なるほど、ありがとうございます。藤井さんが毎回言うてくださっていた、ありのままという言葉。これも一つのキーワードでしたよね。その人らしさとありのままの違い。らしさが逆に檻のように、その人を閉じ込めたり、息苦しくさせる部分もあるんだというようなことを改めて教えられました。そこから、楠神さんはまさに「家がいいか、病院がいいか」こうじゃなくて、「どのように最期を迎えたいのか」っていう、こういう問いかけの仕方が変わっていくと関わりの仕方が変わっていくっていうような、具体的にそういう変化があったということですね。

死っていうのは空間、人間(じんかん)、時間。そういう三つの間のなかで起こる出来事なんだと思うんですけど、どこで死ぬかだけでなく誰に看取られるか、ともに誰と死を分かち合うのか。そういう死の時間を、最終章をどう過ごすのか。というふうに、問いかけの仕方が具体的に変わられた。死をギフトとして受け取る、看取るという、悲しいけど温かな死といえますか。今思

いついた言葉ですが、今日もダジャレ入れますのでよろしくお願いします。「あたたかなしい時間」という、こういう死の時間を改めて考えたということでありました。

そして、ミウラさん。キーワードは、●共生とは？、●命を大切にする、●多様性、違いを認める、でした。ミウラさんの場合は、まさに「ありのまま」ということや「らしさ」というものに苦しみながら、あるいは「消えたい」という思いを持つ若い人たちと日々向き合っているらしい。

残念ながら自殺の多さ、これが一向に減らない。特に若い人たちの状況が、この5年間もほとんど変わらない。また、さっきの表の中にも書きましたが、特に去年から選挙なんかでもそうでしたが、バーチャル、SNSが実際の政治とか生活とか、あるいは人の生き死ににもろに影響するんだっていう出来事に直面する。そういうこともちょっとミウラさんには聞いてみたいと思うわけです。はい、お願いします。

令和3年(2021年)3月 第1回死生懇話会			
【打本さん】			死生懇話会で議論を深めたい キーワードを伺いました
●臨床宗教師			
●死生観を養う			
●死者と共に生きる	【越智さん】		
	●死の種類		
	●医師の仕事		
【ミウラさん】	●生・活	【三日月さん】	
●共生とは？		●生・老・病	
●命を大切にする		●死(生)は誰のものなのか？	
●多様性、違いを認める	【楠神さん】	●苦楽・美醜・悲喜	
	●人生の最終章		
【藤井さん】	●A C P (人生会議)	【上田さん】	
●死生観	●揺れる思い	●死(生)は誰のものか？	
●デス・エデュケーション (いのちについて考える)		●死をわかちあう	
●QOL(Quality of Life) とスピリチュアリティ		●誰が「死を殺す」のか？	

○ミウラ ユウさん



どうも、失礼いたします。ミウラです。はじめにですけども、皆さん専門家でいらっしゃる中で、私だけ本当に野良の活動家としてここにずっと5年間携わらせていただいたことは、本当にご聴講者の皆様を始め、県庁の職員の皆様、先生方にも本当に支えていただいて、ご指導いただいて、何とかここに座らせていただけたかなと思っております。どうも感謝いたします、ありがとうございます。

今振り返りまして、●共生とは、●命を大切にするとか何言ってんだって感じなんですけど、私自身が。5年経ったっていうその5年ってすごい年月なんだなと思いました。5年前には考えられなかったようなことが今社会で起きていると思います。人の生死に対することって、おそらく正解っていうのは存在しないと私は思っています。それぞれ

の中に持つものだと思っているので、その価値観とか答えを固定することなく、皆さんが自分の生死に対する考えや受け止め方にたどり着けるという過程において、お手伝いができたりとか、話し合う場所があればいいなと思って、この死生懇話会が続くことは本当に意義のあることだと感じてきました。

私自身の考え方が大きく変わるっていうことはないんですが、ただ社会がそのように変化していく中で、変えざるを得ないこともあったと思います。私はやはり人と対面するということにすごくこだわりを持ってここまで活動してきたんですが、コロナ禍において非接触ということが起きまして、会えない。その中でウェブ上に居場所を作るということに私が参画しております NPO 法人好きと生きるという居場所を作っている団体がいるんですけども、そこでオンライン上でみんなで集まろうみたいな取組をコロナ禍始めました。そのことがもう本当に手探りだったんですけど、回を重ねるごとに、そこを居場所とする人が現れるようになりまして、今となっては形を変え、回数を変えいろんなことありましたが、まだ継続しておりまして、毎月それを楽しみにしておられる方とか、そこで繋がった人とリアルで会うとか、何かそういうことが起きています。私は

今年 56 歳なので、いわゆるネットネイティブの若い世代ではないんですけれども、でも私たち世代もウェブの時代、ネットの時代に社会参加していかないと若い人たちがこれから幸せに生きるとか希望をもっていけるような社会を作るっていうことを考えたときに、理解がちょっと及ばないっていうかそういうことが起きてしまうと思うんですね。私は先ほど申しましたように専門家でも何でもなくて、アカデミックなお話をできるわけでもないのですが、実感として思うことは若い人たちはずいぶん柔軟にネットの中に、そしてリアルにも自分の社会とかコミュニティをちゃんと作っているんだなっていうのをすごく実感として感じています。これからはそういうことと共生、私が最初に掲げた共生っていうのは、いろんな人が一緒に生きていくっていうことを考えていたんですけど、ネット社会とリアル社会の共生みたいなものをこれからはテーマに掲げていかないと駄目なのではないかなというふうに感じています。

先ほどちょっと自殺ということがお話に出ましたが、この死生懇話会っていうか死や生きるを語るときに、やっぱり自死ということは外せないキーワードでありながら、このことをテーマにしたときにやっぱり傷つく方がおられたりとか、向き合うことがしんど

いっていう方がおられると思うんです。それをいかに向き合ってもらうかとか、いかに傷つけないようにするかではなくって、私は向き合わない選択肢を提案したいなというふうに思っています。別にしんどかったら話さなくてもいいっていうシンプルな話です。それを向き合わなかったら何か誰かに迷惑をかけるのかっていうのと、そんなことは絶対ないので。みんながやっているからできないと駄目っていうのがどうしてもあるので社会には。でもそういうふうに思わないで、私はこのテーマは苦手と、自分の心の中でいろいろ思っているからそれでいいみたいなことが何か普通に言えたらいいなと思うんですね。

それと同時に、やはり話したい人が思い切り自分の心の中を出せる場所っていうのも必要だなと思っています。これからは、そういういろんなことをハイブリッドという言葉が出ましたが、両輪で四輪でたくさんの球を回しながら同時にやっていかないと駄目な時代なんだなっていうのを感じて、頭がついていくかしらとか心が保つかしらとかいろいろありますけれども、そこをやっぱり皆さんと助け合っていけたらいいなというふうに思っております。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。そうですね、コロナ禍で本当に一気に進みましたが、このバーチャルの空間の中での繋がり。まさに先ほど楠神さんが言われたウェブ上に場所、リアルなこういう場や空間の中だけじゃなくて、ネット空間。これが一方ではまた誰かの安心の場所になる。しかし一方で、その中で責め合ったり、叩き合って、そして、バーチャルな顔の见えない関係の中で追い詰められるという、この諸刃の剣であるということをもとを共生をどうするかということがこの5年間のうちに本当に大きな課題になったということですね。

それから、無理して向き合う必要はないという、弱さということも受け入れながら、自分の弱さとかいうところも含めて、ときには逃げるとか。いろんなことの価値や大事さを再認識したというようなことかと思います。

越智さんはまだご到着でないですが、越智さんはいつも我々が、ともすれば死生を美化するというか、綺麗事を語ってしまいそうなところを、医師の観点から死ってというのはそんな綺麗事じゃないんですよという観点からお話をいただく役割をいつも担っていただいていたと思います。気をつけな

いといけないと思いながらも、どうしてもそういうふうになるんですが、ここでこういうふうに死にたいとか、温かな死というようなことを喋れば喋るほど、そのようにできない、なかなか、そういう状況にない人たちにとってはそれがまた重荷になることがあるんじゃないか。良い死というようなものを押しつける、そういう暴力がないようにしたいというふうに思いながら、そんなところも越智さんはいつもフォローしてくださっていたかなと思います。

さて、三日月さん。今、委員の皆さんのお話も聞かれ、また藤井さんのメッセージも聞いていただきました。いかがですか。●生・老・病、●死(生)は誰のものなのか?、●苦楽・美醜・悲喜。この懇話会を作ることになった知事命令を出された張本人ですから、少しそこを聞いてみたいんですが、よろしくをお願いします。

令和3年(2021年)3月 第1回死生懇話会			
【打本さん】 ●臨床宗教師 ●死生観を養う ●死者と共に生きる	【越智さん】 ●死の種類 ●医師の仕事 ●生・活	【三日月さん】 ●生・老・病 ●死(生)は誰のものなのか? ●苦楽・美醜・悲喜	死生懇話会で議論を深めたい キーワードを伺いました
【ミウラさん】 ●共生とは? ●命を大切にする ●多様性、違いを認める	【楠神さん】 ●人生の最終章 ●ACP(人生会議) ●揺れる思い	【上田さん】 ●死(生)は誰のものか? ●死をわちあう ●誰が「死を殺す」のか?	
【藤井さん】 ●死生観 ●デス・エデュケーション (いのちについて考える) ●QOL(Quality of Life) とスピリチュアリティ			

○三日月大造

ありがとうございます。もう5年経つんで

すよね。5年経って改めてこの間、お話を伺ったこととか、みんなで考えを出し合ったことを振り返ってみて、やっぱりやってよかったなど。やらなかったこの5年間で、この死生懇話会でいろんなことを聞いて、話して、考えてきた5年間ででは、このあと生きる何か意味とか意義とか、持ち物が変わったんじゃないかなと今思っています。

さっきミウラさんもおっしゃったように、生きることとか死ぬことに正解はないので、その時々その人々、やはりありのままで。良くありたいとか、自分らしくありたいとかそういう思いはみんな持つんでしょうけれども、その中で葛藤しながら懊悩の中で、生きていたり、もしくはその生きていることを閉じていくっていう。そういうことの中で人生があるんだろうなということは、改めて学ばせていただきました。

この5年間でやっぱりあったことっていうのはさっき上田さんも振り返っていただきましたけど、コロナもあったし、災害もあったし、戦争もあったし終わってないし、そして何より前はおられたけど亡くなられた人との死別もあったし、5年間齢も重ねたしっていう。こういうことがあるんだと思いますが、やはり今私たちはここにいるという。生きているという。こういうことは変わらずあるとするならば、必ず迎える死に向かって、

どんなことをさらに考えていかなあかのかなというのは、この上田さんのキーワードからも投げかけられていることなのかなというふうに思っています。ですが、県庁内で議論したことにも意味があったと思います。当初は「こんな行政で考えるんですか。」「個人の価値観でしょ。」「もしかしたら宗教のお仕事されている方なんかが考えていただけた方が…」っていう意見や戸惑いもあった中で、行政の中でもこの問題を捉えて僕は良かったなと思っています。この意味は後々表れてくるのかもしれませんが、ただせっかくの機会ですので、今日ご聴講いただいている方やご参加いただいている方のいろんなご感想なんかもいただきながら、さらにどういう考え方をすればいいのか。こうして委員をお務めいただいて、集ってやる死生懇話会は一旦5年間でひと区切りにしようかなと思っていますが、この後滋賀県がこの死生懇話会をやってきた行政がどんなことを考えたらいいのかな、なんてことも一緒に議論してみれたらいいなというふうに思っています。ありがとうございます。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。ちなみに、三日月さんは何かご自身の中に変化があったとすれば、一番はどんなことでしょうか。

優しくなれたとか？

○三日月大造

優しくなれたというか、いろんなことにあんまり以前よりも動じなくなったかもしれませんね。

○上田 洋平さん

動じなくなった？

○三日月大造

というのと、弱くなったかもしれない。

○上田 洋平さん

弱くなった？

○三日月大造

はい。弱くていいと思えるようになった。

○上田 洋平さん

いつもその「弱さ」の話には突っ込んできました(笑)。政治家が弱くあることを肯定していいのかとね。年頭会見でね、弱さについて言及されたというところ。

○三日月大造

上田さんもいつもそうおっしゃるんですよ。そうなんです。とにかく、選挙で選ばれ

る人は強く見せたいっていう性があるのかもしれませんが、そればかりでもないのかなと思える自分はいますね。

第1回死生懇話会を開催したのが 2021 年3月。その3月に私はたまたまですけども、初期の食道がんだと診察されてその後コロナ禍で対応しつつ、入院させてもらって、手術をしてもらって。その後、4年経って、経過も良好なんで再発もないので、おかげさまで元気にやらせていただいているんですけど、そういう経験もありました。

この冒頭お話ししましたが、20 年前に父を看とり、昨年母を看とりまして、まさにさっき楠神さんおっしゃったように、人生の最期をどうやって迎えたいっていう話をこの 1~2年ずっと母と繰り返しやりながらですね、もう一切医療は受けなくてもいいから、もう処置もしなくてもいいから、もうただいてくれたらいい、送ってくれたらいいって言われました。そばで見えていてつらかったですけど、でもすごい旅立ち方するんだなということを改めて感じさせてもらいましたね。知事だから実母が亡くなったっていうと大きい葬式した方がいいかって言ったら、もう絶対そんなんするなと。「亡くなって身内だけで見送りました」って、後で身内だけに伝えればいいって言われ、その通りしましたけどね。ただそうやって、死を直視す

るっていうことを冒頭、私第1回の懇話会で言いましたけど、そして生を輝かせられたらいいねって言いましたけど、そんなに生易しいことではないんだなということも越智さん最初におっしゃってくださいましたけど、なんか実感する日々ですね。だからこの会をやって、やった方が良かったと思っていますけど、ますますわからなくなったことの方が多かったかもしれませんね。

○上田 洋平さん

そのわからなさを皆で共有しながらきた懇話会でした。わからないから無限に語ることがありますね。専門家とか有識者っておっしゃいますけど、死に関してはみんな素人というスタンスですよ。

越智さん、駆けつけてくださってありがとうございます。越智さんにはもうちょっと待ってから話を振りますが、死生懇話会に携わってこられて、この間いろいろな社会情勢変化がありました。また最初に出していた越智さんのキーワード●死の種類、●医師の仕事、●生・活。5年間の懇話会の時間の中で変化したとか、思いの変化とか、あるいはこういう出来事が新たにあってというようなことを伺ったところですので、その辺またこの後で話を振ります。

その前に、行政(県庁)が「死」「生」を真

正面から考える意味や意義ってどんなものか。ちょっと喋っていただいた部分もありますけれど、ミウラさんにとって、「こういうのは役に立つ」…という言い方をすると、これまでこの懇話会ではそういう考え方で死を語るんじゃないよねって言ってきたことと、矛盾するんですが、あえてこの懇話会が、どう役に立つかというところ…どうですか。

○ミウラ ユウさん



最初にこのお話をいただいて委員になったときに、今まで私がそういう場所ではないところで生きるや死ぬについていろんな人と語ってきたときの反応と行政がこれを取組としてやるんですって言ったときの反応はやっぱり違って。私自身は政治っていうのは人々の暮らしと直結しているものだからイコール生きるや死ぬと直結しているということだと思っているので。一番最初に

県庁内でも賛否があったというのを聞いたときに、政治こそがそのことを語るべきんじゃないかなというふうに思いました。私は今までになかった本当だったら全国どこでもこの取組がないといけないはずなのに、そういうものがなかった中で滋賀県が第一歩を踏み出すということは、とても大きな意味があって。行政もともにこのことに取り組んでいくんだということを周囲の人に伝えたときに、初めてみんなで語っていいんですねってなったというのが私の周りで起きた変化では一番大きかったです。意義はもちろんありますし、続けていくというよりもずっとそうでないと駄目だと私は思っています。

○上田 洋平さん

打本さんどうですか。宗教や宗教家というのは、人々の死生に関わる心のインフラといいですか。そういうものとして町、人々と関わっていると思うんですが、それを行政がやる。打本さんの視点からはどんなふうに感じられましたか？

○打本 弘祐さん



はい、ありがとうございます。伝統的に熱心に信仰されている方にとってはもう元々持っているインフラが非常に強いんですけども、やっぱり若い人であったりとか、ちょうど今サリン事件から30年、当時私は高校生でしたけれども、宗教とか仏教も含めてすごい不信感が強くなっていた時期を若い頃に経験しているんですね。ですので、私自身も宗教家ですので、宗教服を着てこういう場面に出たこともありますけれど、それを着ることによって押しつけになってしまうんじゃないかなという遠慮がすごいありますし、その辺押しつけにならないようにとても気をつけている。臨床宗教師っていうのは、実はそういった布教をするとか、積極的に信者を獲得するような立場ではなく、あくまでも聞く立場として存在する公共空間で活動するっていう役割があります。キ

一ワードで挙げていたのはそういったところがあります。そういった中で、宗教や信仰を大事にすることももちろん大事なんですけども、一方で押し付けになってしまったり、それによって来られない方がいらっしゃる。不信感を持って、死生観とかを考えたいんですけども何か遠慮してしまう、タブー視してしまうっていう空気があったと思うんですね。だけれども、印象に残っているのがですね、VR 時代の弔いのときに高校生の方が参加されていたんですね。その方が参加できる理由ってなんだろうと思ったときに、やっぱり行政がやっているからこそその信頼感であったり、行政だから安心して申し込めるっていうか、そういったところがきつとあったんじゃないかなと思うんですね。宗教が全面ではないけれども、死生観とかっていうのは、さっきミウラさんがおっしゃったように、ひとり一人が築き上げていくものなんだから、それをフラットに語れる場を提供してくださって。行政がなすとやっぱり安心感とか信頼感を持っていらっしゃる方が多いんじゃないかなというふうに思うんですね。だからこそ、宗教の立場でもいいし、または行政の方でもいいし、同じように考えられる土俵を作っていただけたのかなというふうに思っています。それがまさにこの県庁がなされる意義なんではないかなというふう

に思います。

○上田 洋平さん

楠神さん、いかがですか。

○楠神 渉さん



私、普段ケアマネジャーをする中で、例えば人生会議。将来、もしも大切な家族の方が重い病気にかかったときに、どうするかみたいなことを前もって聞いておくのがいいですよ。前もって家族同士で相談できるように支援していきましょうという中であっても、まだまだそれはタブー視されているような感じがします。つまり、大切な尊い命に対して、例えば、「まだまだ元気なうちからおじいさん・おばあさんの最期を考えたりするのは不謹慎じゃないか。そんなこと喋ってもいいのか。あんた、なんて失礼なことを言うんだ。」みたいなですね、そういう

風潮がまだまだあると思います。打本さんがさっき滋賀県にもいろんな価値観があるって言ったから、全ての地区がそうではありませんが、地域によってはいろんな文化があって、まだそういったことに触れることがちょっと好ましくないんじゃないかって地区も確かにあります。そんな中で今回の死生懇話会で、この県庁で死や生について語り合う場というのを設けてくださって、それも県民さんに発信する。その中には、なんと滋賀県知事も入って一緒に議論する場というのを設けてくださったので、こういうことをちゃんと喋ってもいいんだという空気が出てきたように思っております。

今日の懇話会のチラシを i・mart(アイマート)っていうスーパーの掲示板に貼ってあったんですが、今日午前中行ってたら何人もの方から質問されました。「死について喋るの？ 県庁で？」みたいなね。そういうことを聞いている人は、そういうこと喋ってもいいのかなって、喋ってもいい時代になったんだと思ってくださってるような気もするんですよね。だから、私は行政が死や生について語り合う場を設けたことによって、一般の県民レベルにおいてもそういったことを喋ってもいいんだと、尊い命なんだけど尊い命だからこそ、前もって喋ってもいいんだ。そういう変わるきっかけをね、何かいた

だけたような気がしています。

○上田 洋平さん

はい、ありがとうございます。

それでは、越智さん。前の質問も含めてですけれど、5年間いろいろありました。越智さん自身にも変化があったかもしれませんが、ここまで参加してこられたご感想とか、今、キーワードを挙げるとしたらどうですかね。

○越智 眞一さん



はい。まず、遅れまして申し訳ございません。思いのほか渋滞で、1時間前には着くはずだったんですが、申し訳ございません。

この5年間ですね、まず行政が取り上げられたということは非常に重要なことだろうと思います。というのは、先ほどサリン事件の話もありましたけれども、ここしばらくの

ことを考えても、大規模災害とかそういうことで非常に死というものが身近なものになって、突然の別れっていうか。みんな頭の中で思っている、ドラマの中で最後の言葉を言ってガクって言って死ぬ。そういうようなドラマチックな死・別れというものを頭の中に描いておられたのが、突然の死というものが出てくる。そういうのがあり得るんだっていうことを実感できている時代に、こうやって死ってというのが、裏返しはどうやって生きるかですけれども、取り上げる機会を作っていただけたことに非常に感謝をしています。

私自身はこの死生懇談会に参加をさせていただいて、相変わらず 100 歳前後の方の穏やかな死というものを目の当たりにしてまいりました。幸せだったと思います。その方たちは皆さん穏やかな顔をして、最後に非常にこちらにいい印象を与えていただいてあの世に旅立ちになった。残された方々も、満足をして送られたという経験をさせていただきました。ただ、私の医者としての経歴からいきますと、若いベイベーから 120 歳まで見送らせていただいたんですけど、ベイベーであったり一桁の年齢で逝かれる子どもさんたちの死というものは、非常にこちらの心に傷を残すというか爪痕を残していつてしまう。イギリスは、ダウン症

の子どもの心臓の手術はしないんです。というのは、心臓の手術をしてもしなくても、平均余命 30 歳で死ぬんだと。だから、しないということだそうですが、そのときにどういふに言っているかという、この子たちが 30 歳で死ぬとしたら、我々が 60 年 70 年生きる、それを 30 年に凝縮をして、もっとちっちゃい子どもたちはもっと凝縮して一生を過ごすんだと。だからそれを支援しましょうっていうような言い方をして、周りの方を納得させて、自分も多分納得しているんだろうと思います。確かに私が見送ってきた子どもたち、一生分の凝縮した思いを皆に残してあの世に逝かれました。そういうことからいくと、この会で死というものをテーマに挙げながらも、どうやって生きるかっていうことを言葉の裏に含めたディスカッションができたっていうのは非常に有意義に思います。どうもありがとうございます。

○上田 洋平さん

そうですね。越智さんは生・活の二つの字をキーワードに挙げてらっしゃいましたけど、今ほどのお話は若くして死んでしまうけれども、その分濃い生を生きられるように、みんなで支援をしていこうという。まさに、活の方の生きるということにも通じるような

感じがあったのかなと思います。さっき、越智さんがお越しになる前に、越智さんはいつもここでの議論が、ともすれば美化したり綺麗事になりそうなところを、いやそうじゃないんだという現場からのお声をいただいていたというお話をさせていただいたところであります。ありがとうございます。

ちょっとずつ会場にも広げていきたいと思います。今ほどの話題に関してこんなご質問を頂きました。「明確な答えや着地点がない死生のような議論を公の場で行い、コストや手間をかけることに対して様々な意見があると思います。一方で、明確な意味や目的がある議論しか許されない社会も生きづらく感じます。パネリストの皆さんも様々な組織に様々な立場で所属されているとは思いますが、日々の業務の中でゆるさと厳しさのバランスがうまく取れた対応ができていますでしょうか?」。ちょっと答えきれんかどうか分かりませんが、やっぱり明確な意味・目的、あるいは役に立つのかどうかというだけの議論。それだけだと、やっぱり生きづらいよね。でも一方で、ゆるさと厳しさ、バランスというようなこともありますが、その辺どうですか三日月さん。

○三日月大造



そのご質問や投げかけは誰に当たるのかなと思ったら、やっぱり私に当たりましたか。

おっしゃる通り、わからないことはわからないって言うようにしていますし、「最善を尽くします。やることの意味や効果を見いだせたらいいなと思って始めます。ただできないかもしれません。」っていう正直さは、常に大事にしたいなと思います。当然、行政ですから使わせていただくのが公費。そして関わるのが職員ということであれば、もっと他にもやるべきことがあるんだろうというそういうご指摘は、しっかり受け止めつつも、この死生懇話会で例えば議論したようなことについても、こういう学びがありました。こういう気づきがありました。というようなことをぜひ皆さんとできる限り広く共有していけたらいいなと思っています。とかく、成果

や効果を短期的に求められることが多い世の中なので、そうじゃない視点も大事にできたらいいなというふうに思っています。

○上田 洋平さん

三日月さん、引き続いてなんです。この会場からの質問で、「知事がこの取組を通して生きる上で持ち物が変わったという言葉で表現されています。変わった持ち物なんですか？」と。

○三日月大造

戸惑っていいんだという持ち物でしょうね。こういうとき私どっちかって言うたら、パンパンと答える方なんです。で、答えないといけないって思っていたんです。でも、死生の事なんてわからないし、死にたいんですって言われたときにどう答えようかなっていつも考えるようになったりとか。多分こつらいんですとか、わからないんです。って言える持ち物を持ったんだと思います。すいません、答えになってないのかもしれませんが。

○上田 洋平さん

何となくうまく言いくるめられた感じがします(笑)。しかし、たぶん議会ではそれができませんもんね。

○三日月大造

議会でも…例えば今の県政に異なるご意見や反対意見なんかもらったときも、一旦は受け止めて、そして「私はこう思うので、こういう方針でやろうと思います。予算をつけようと思います。事業をやろうと思います。」ということを申し上げた上で、いつも何か入れるようにはしていますけどね。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。

もし今の、持ち物のことで、皆さん何か変わったみたいなこと思い当たることはありますか。打本さん。

○打本 弘祐さん



私、さっきミウラさんが言っていたのがすごく自分の中でそうだったなと思うことがあって。逃げることもいいし、苦手なことはや

らんでいいし、答えんでいいっていう。確かに私もこの死生懇話会の中ですごく答えにくいなとか、宗教者の答えはあるんですけど言わんとかうかなというときは、他の方もいろいろ持っているし大丈夫だろうと思って、何か言わなくてもいいかなっていう。人に任せるっておかしいんですけども、そういった心の持ちようが少し出てきたなっていうのはすごく思っています。それは、死生懇話会のありがたいことでしたし、ぶっちゃけ言いますと死生懇話会が終わった後に、会場の方に呼ばれまして、「もっとズバっと言ってくれへんか。お坊さんなんやから。」って言われたことがあって、すいませんって思ったんです。坊さんらしくズバっと解決みたいなね。そういう方がいらっしゃるの、確かにこういった場面だからこそ言うべきこともあるんだろうけれども。

ただ、私は美術館でのイベントのときにも声かけられまして。大学生の方だったんですけども、その方の自分が好きな歌の中にこんな歌詞があって、私はそれが自分の死生観なんですっていうのをポンと投げてくれた。その方のことはすごく印象に残っているんですね。そのときはお坊さんの格好をしていたんですけども、そういった方が投げってくれるっていうのは、構えとして雰囲気として受け入れますよっていうのがきつと

出ていて、その方に伝わったんだろうなと思います。なんかゆったり構えられるようにちょっとなれたのかなというのは死生懇話会のおかげかもしれません。

○上田 洋平さん

もし今の問いに対して何かあれば。なければ、次にいきます。まだあと二つ質問をいただいています、それはこの後紹介します。この後紹介するときに、職員さんにもちょっと喋ってもらうかもしれません。

では、もう一つのテーマ。「死」「生」を巡って考えていくべきこと、この懇話会で積み残したこと。設置してよかったなっていうのは、もちろん皆さんは委員でいらっしゃるから、積極的な意味、プラスの意義や価値を感じて参加していただけたと思うんですが、一方でこの懇話会で積み残したものや拾いきれなかったものもたくさんある。「死」「生」の問題なんて、5回でできるものじゃないわけですから。だけど、今後バトンタッチされていく中で、引き続きこういう形ではないけれども県の中でとか、皆の中で考えていくべき、あるいは積み残した、拾いきれなかったことは何かありますか。今回は楠神さんから。

○楠神 渉さん



積み残したものの。私は二つ思うことがあって、一つは生と死の、死に関することであると、ここでずいぶん議論を深めることができ、本当に人それぞれで良くて、それが途中で迷って、今日皆さん言ってくださったみたいに答えがなくてもよくて、そういうところは一定突きつめることができたのかなと思います。ただ、実際のご自宅とか病院とか施設において、当事者の方がどういうふうに思って、どんな苦労があるのか。当事者も交えた議論する場みたいなことが実は今回できなかったのかなと。専門職とかいろいろ関わっている立場からの意見交換なので、もしかしたらこれを聞かれている家族さんの中には、いやいやそんなもんじゃないんですよという声も多分あったと思うんですね。そういうのを発信する場みたいなものが今後あれば、より本人さん家族さんに

寄り添ったご支援に繋がるのかなというふうにちょっと思っておりました。だから、当事者の方を交えたもの。もしかしたら、それは県レベルではなくて、地域の中でした方が良いような気もするんですけども、そんなふうに思ったりもしております。

実は、この死生懇話会の影響もあったと思うんですけども、昨日東近江市で在宅看取りを考える研修会っていうことで、お亡くなりになった家族さんやその娘さんにも登壇していただいて、それに関わった医師の方とか訪問看護師とかケアマネージャーさんとかがまさしくこういう場で意見交換する場がありました。そこは死について、より深く深く現実的に考える場にもなったので県であったことを踏まえて、各地域でももう少し深掘りした場が今後生まれてきたらいいなというのが一つ思います。

もう一つ。生について拾いきれなかったものが、ミウラさんとかが生きづらさみたいなことをおっしゃったりもしておりました。今、日本では毎年すごく多くの方が自死されている現状があって、その中には、子どもも相当数、小・中学校の生徒さんなんかもらっしやいます。そういった社会の生きづらさが、本人じゃなく社会のあり方が問題だとするならば、もっともっと生について、今回喋る機会があったらよかったなと思って

います。

私、たまたま介護に携わっている関係で、10 年前から定住外国人の方を対象にした介護の初任者研修を滋賀県から委託されて、していました。人材不足を補うための一つなんですけども、そこで最初の1年目に研修会をしたときに県の担当課とお話をして、介護の勉強だけじゃなくて日本のルールをしっかりと知ってもらおうねと。つまり、遅刻したらだめですよと、休むときはちゃんと連絡するんですよと。ごくごく当たり前のことなんだけど、そういうのがルーズな国もあるからやってみましょうねって。3年やった後に、県の担当課と喋って、「どうでしたか、楠神さん。」って言われたときに、「なんか、私間違っていた気がしました。」って言ったら、県の担当課も「私も間違っていたと思う。」って言うんですね。「何が間違っていたと思いますか。」って聞いたときに、「今まで生きてきて、例えば仕事とか会社とか、そういうのは、第一に考える、最も大切だっていうふうに考えていました。考えていくのが普通かなと思っていたんですけども、違うんですね。」と。毎年来る6カ国7カ国の人たちは仕事とか会社が最も大切ではなくて、家族、パートナー、そこが人生において一番大切だと。いろんな国の方がそうおっしゃるんですね。ちょっと一つエピソードを言う

と、ある時、初年度ですね。講師に立った先生の方がちょうど冬場で風邪が流行った季節なんですけども。

先生「今日、ちょっと娘がぐずっちゃって。

皆さんも風邪気をつけましょうね。それでは授業いきますよ。」

生徒「ちょっと先生待ってください。お子さん熱が出ているんですか。」

先生「ちょっと鼻水が出ているぐらいだから。」

生徒「誰かいらっしゃるんですか。」

先生「おばあちゃんがいてるにはいてるんだけど…」

生徒「今すぐもう帰ってください。あなたの大切な子どもでしょう。そのためであれば、私たちは別の日にも全然出てきますよ。」

みたいな。そんなことが何回も起こったんですね。だから何か私は当たり前のように、多少のことであれば頑張って会社に行く。言ってみたら家族を多少犠牲にしてもそういったものが当たり前と思ったんですけども、そうじゃない国々が圧倒的に多いと。そんな中で、日本の自死率っていうんですかね、自殺率が高いことを思うと、もしかして今の私が考えている社会のあり方とか一般的にこれが普通だと思っていることが間違っていたんじゃないかなと思ったりもしてい

ました。そんな中で今回の生と死について語る中で、生について語るときに、日本の今の価値観というものが本当にどうか、生きづらさってどこから来ているのかなみたいな、そんなことをもし県レベルでお話する機会があったらなと思ったりしています。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。当事者の方と議論するっていうことが、現場現場で、また地域地域の中で広がっていくといいなと思いますね。あと、生について拾いきれなかった。今後の死生懇話会について、担当の職員の皆さんとも議論はしていたんです。そろそろ生についてももうちょっと突っ込んで喋ってみてもいいねって。だけど、まだ死っていうものが考えきれてないんじゃないかって。考えを終えられるものでもないんですけど。

一方で、行政では最近ウェルビーイングというのがキーワードになってきました。デジタル庁がウェルビーイング指標というものをウェブ上で公開しています。県のウェルビーイングの評価とか、各市町の評価がたちまち出てくるんですね。何点かというスコアで出てくるわけです。それを見てまた、あれ？とか思うわけですね。ウェルビーイングの指標って、もともとはウェルビーイングに

関する議論のきっかけにするために開発されたんですが、ウェルビーイングが指標化されて、そのものさしから点数が低い高い、〇〇市はウェルビーイング高い低いってなってくると、その状況は果たしてウェルビーイングな状況なのか。そんな話もいずれしたかったなと思いました。それは今後に引き継がれていくんだろうと思います。

仕事についての話も先ほどしていただきました。ワークエンゲージメント、あるいは働きがいを考える上でのワークライフバランスも大事だと言われています。仕事との繋がりが大事な一方で、セルフエンゲージメント、自分自身との繋がりたいなのをしっかりと持つ。それも大事なのかもしれません。

これは広井先生もおっしゃっていましたが、公私が両極に分離してそれぞれ肥大化していく。一方で、ともに一緒に助け合って仲間だという、共の部分が増えつつあるんじゃないかと。そういうこともまだまだ議論できたかなと。あるいは地元っていう話も出ました。ミウラさん、いかがですか。

○ミウラ ユウさん



9年連続、出生数が過去の出生数を最低記録をどんどん塗り替えていって、片方で昨年 10 代の自死は最多、一番多かったと言われています。社会の課題として国の課題として少子化がある一方で、多くの未来ある若者の命が奪われているという現状がある。自死といって、自分で命を絶つことですが、おそらく私が想像するに、私が今まで対面してきた若者の中には、やっぱり自分が何者にもなれないとか、自分はみんなと同じようにできないとか、なんかそういうことを苦にして死に向かう若者たちの声を多く聞いてきたので、自死と言えども社会が追い詰めて背中を押したってということはないかっていうことをどうしても考えないと駄目というふうに思っています。

ウェブの発展によって、居場所とか繋がりたいみたいなものはすごく広がったと思うん

ですけど、片方で数字とか何かいろんなものが可視化されるっていうか、人の心は絶対お金では買えないんですけど、お金がたくさん集まっている人は人気がある人だったりとか、視聴回数をたくさん持っている人はそれだけの人に支持されているんだみたいなことがあります。それは数字であって、その中の真実はどうかわからないのに、何かそういうふうに見えてしまうというか信じてしまうというところがあると思います。今まで比較競争社会っていうか。先生の言うことがちゃんとできる子はできる子みたいなので、自分で発想したりとか自分で決断したりとか、何か失敗してもいいからやってみようみたいな、そういう思考をどんどん削がれて、言われた通りに言われたことをちゃんとするっていうのに邁進させてしまう教育をしてきてしまったなっていうふうに思います。ここからは、人の心は数字では表せないし、お金では買えないし。やっぱり自分たちがお互いに向き合う中で、切磋琢磨して泣くことも笑うことも喧嘩することもあるかもしれませんが、その中で人間性をお互いに見出していく先に、お互いの命を大切にするとかいうことが見えてくるんじゃないかなというふうに思います。

もう一つ言うと、なんていうか今現実社会を生きている人たち一般の人間っていう

か、私なんかも本当にごくごく一般的な生活をしている方なんですけど、その中でやっぱりもう普通にお金苦しいんですよ。なんかもう収入は増えないっていうか、むしろ支出はどんどん増えるけど収入は増えず。私が若い頃に思い描いていた50代半ばでそれなりにちょっとお金に余裕もできて、少しは貯金もあって、自分の好きなことをセカンドステージじゃないけど自分の第二の人生が歩めるんじゃないかみたいなことを考えていたんですけど、全然無理やんと思うんですよ。やっぱりそれって、すごく心に余裕がないっていうことだと思います。助けて生きてねとか、自己責任で頑張っただけでねって言われても抱えられないことがほとんどなんですよ。だから、そういう社会の課題を個人の責任にすり替えてきたっていうことは、ちゃんと事実に向き合えないと駄目だなと思っています。それはもうこの社会を作ってきた大人たちの責任なので、私は自分が現役と言われる時代の中で、何とかそれには決着をつけたっていうか、やっていきたいなとは思っています。

ちょっと質問されていたこととずれているかもしれないんですけど、皆さんの話を聞いていて、それがすごく思い浮かびました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。打本さん、越智さん。積み残したものというところで一言ずついただけますか。

○打本 弘祐さん



死者とともに生きるっていうのは最初のときにキーワードにも挙げましたが、私はあくまでも死者というものに最後こだわりたいなという思いを持っています。

ただ、個人化が進む中で、伝統的に亡くなった人をお寺でお葬式をしてとかですね、その後ご遺族が弔いをしてっていうことは、これからなかなか難しくなっていく世の中なんじゃないかなと思っています。身寄りのない方であったり、引き取り手のないご遺骨っていうのはやっぱり今増えております。これから葬送であるとか埋葬っていうものをどういうふうに考えていくのか。葬儀者の

方とか火葬場の方とかですね、行政の方もやっぱりそういったところに直面している現場があるんじゃないかなっていうふうには思っていて、そういった方の声っていうものを死生懇話会で1回聞いてみたかったなっていうのは正直思っています。実は、昨日研究会でエンバーマーの方とか葬儀者の方の話も聞いていたんですけれども、そういうのがまた県でもできればいいのかなと。

また、引き取り手のない遺骨とか身寄りのない方の死というのを昨年だったと思いますけど総務省が全国的に調査を市町村に始めています。また、宗教者の責任でもあるので、宗教者の仲間がアンケート調査などをしています。その中で、引き取り手のない遺骨とか身寄りのない方の死を行政の方が対応されていますけれど、各地バラバラであつたりしますので、そういった方々のことというのはやっぱり菩提寺があつたりとか地域文化に根ざした方であれば、そのまま弔いができる方もいらっしゃいますけれども、無宗教の方であつたりとか先ほど楠神さんが言われたように、海外から来られている方、イスラムの方の土葬の問題とか。そうしたことも含めて、死者となる私たちは、もうすべからく皆さん死者になるわけなんですけれども、安心して弔われたりとか見

送られたりとか、埋葬されていくということを県や社会全体でどういうふうを考えていてどういうふうに対応していったらいいのかなって。個人の責任とか、宗教の責任なんだからとか、踏み込まなかったら見えてこない問題なんじゃないかなと思っております。

そして、これはもう少しだけ踏み込ませていただくと実験動物とかペットのことであつたりとか、人間以外の死というものをどういうふうに考えていくのかっていうのが、また今後議論していくポイントになるのかなと。これは、やっぱり県のレベルとかで市区町村でやっていくような方にも繋がるかなというふうに思っていますし、また様々な部署に繋がるようなテーマなんじゃないかなというふうに思っております。以上です。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。そうですね。個人化が進む中で、死をいかに分かち合っているのか。その死の文化みたいなものの形とかあり方をもっと深められるといいかなと。

それからアニマルウェルフェアというのか、そういう観点についても。例えば、湖岸道路を1日走っていると何匹のタヌキの死に出会うとか、みたいな話があるわけですよ。そういうことも、ひょっとしたらこの

あたりで話せることだったかもしれませんが、引き継ぎたいところかもしれません。

続いて越智さん、いかがでしょうか？

○越智 眞一さん



積み残しからいきますと、当事者の方のご発言も多かったんですけども、我々の発言が上から目線になっていなかったかという反省点があります。介護の話をして医療の話をして、施す側の意見ばかりでそれを受けられる方の切実な気持ちというのが、本当に我々が聞けていたかどうかというのは反省すべきことではないかというふうに考えております。できるだけわかるように頑張っているんですけども、本当にわかったかどうか自信がありません。

それともう一つですね、生きるっていうことをみんな肩肘張ってですね、頑張って生きなくちゃ！っていうふうに思っておられる

じゃないかっていう。大体のこの懇話会の話からいくとそうなるんですけど、そんな肩凝ることやめましょうよ。風に吹かれてヘラヘラと、気楽に言っておかしいんですが、流されてみるのも一つの生き方。そうしなさいというわけではありませんけれども。一つのポリシーを持って突き進まれるのもいいですけども、流されてみるのも一つの生き方だろうと思います。というのは、私医者になって50年弱。開業してから40年で、医師会の役員を大津で会長を4年と県で6年ちょっと10年ちょっとやっていました。ずっと会のことを考えていたんですけども、辞めて、気が楽になって、さあ、何も考えんでいいぞ！っていうことになって、非常に気が楽になりました。気が楽になったから無責任なことを言うというわけではありませんけれども、かえって視野が広がったような気がします。こんな生き方があったんだっていうか、こういうことをやりたいんだというのがどんどん広がっていく。何かみんな生きるという自分の思っている生というものに対して、視野を狭めているんじゃないかっていうふうに感じるようになってまいりました。死についても多分、そうなんだろうと思うんですね。死っていうのは、全て終わりだとか。死ぬときはしんどいんだろうな、痛いんだろうな、苦しいんだろうな。それは

そうかもしれません。けれど、死んでこっち側に、あんどきこうやったと言ってくれる人はいないわけですから、そのときは流されてみたらいいんだと。もっと肩の力を抜いて、生きる死ぬっていうものに対処していったらいいんじゃないかというふうに私は思いました。以上です。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。ということで、そろそろ時間がやって参りました。最後に三日月さんにコメントをいただきますが、その前に聴講者のコメントをご紹介します。「児童養護施設の職員です。子ども支援の根本になっているキーワード、この死生懇話会で全て出ていると思いました。今のありのままの子どもを受け止める職員が自分の正しいを捨てる。弱いと思う自分を受け止めることができたら良い。退所後どのように生きたいのか。子どもに何かすることに意味がある。何かのためにするのではなく、することで子どもが何か感じてくれると思っています。」というようなこういうご感想でした。

それから、「昔から見えています。まさか本が出るとは。早速読みまして面白かったです。当たり前ですけど登壇している人たちだけでやっているんじゃないんですね。その裏で職員さんが動いているんですね。死

生という難しいテーマ、しかも知事からの様々な投げかけを職員さんが懸命に考えて動いているのが、印象的でした。5年間でいろいろ議論があったんですね。集大成ともいえる本を読ませていただきました。職員さんの一人称というのがすごく斬新でした。割と読書するんですがこんな本なかったんじゃないかな。普通知事が考えたことだから知事目線。表紙も知事みたいになりがちだと思いますが、そういう意味でも斬新でした。どこの県とは言いませんが、うちに顔が入ってなくて怒ったっていう知事がいるとかいないとか聞くので滋賀県は信頼関係があっていいな。」ということであります。

「答えのない議論といいますか、答えがあるように見える仕事だって結局は予算と時間を限ってそれっぽく仕上げていてだけで、本質的にはやっぱり人生仕事に明確な答えなんてないんだと思います。わからないこともいっぱいある中で、わからないって言えることは当たり前のはずだけど言いにくい。そんな中、わからないと堂々と言える雰囲気を作ってくださる知事も県庁の皆さんも委員の皆さんも素晴らしいと思っています。ありがとうございます。ぜひ最後に本を書いた企画調整課のお二人、本の反響や今日のまとめをどう感じているかマイク

を回してもらえれば。」ということです、知事のコメントの後、最後に事務局に返しますから、そこで答えてください。これは聴講している方からの依頼です。

僕からもう一つだけ積み残しを挙げるとすれば、自然という観点をもうちよつと議論できるとよかったかなと。伊吹山の土砂災害に直面して考えたのは、いつからか自然と人間が分離をして、科学技術とかいろいろなことを使って、人間が自然を不自然化してきたとでもいうのか、そういう営みがあったんじゃないか。だから、これをもう一度自然化する。自然科学から自然化・学へ。そういう方向なども議論ができると、さらに滋賀県らしい死生の話、自然も含む死生ということ、この滋賀県ならではの観点から見られるとさらに面白くなるのではないかなというふうに思います。ということで知事、最後まとめのコメントを3分ほどいただけますでしょうか。

○三日月大造



ありがとうございました。毎回そうなんですけど、あっという間に時間が経ってしまうということと、お一人お一人が立場ではなく、もちろんご経験に基づいてなんだろうけれどもお話いただく一言一言が染みるな勉強になるなって思いながら過ごさせていただきました。ただ、越智さんが最初におっしゃったように、ちょっと何か行政目線とか上から目線とか押しつけになってはいなかったかっていうことは、さらに顧みながら、これからのことを考えていきたいなと思いました。

何か積み残したものがないか、拾いきれなかったものがないかっていう最後におっしゃったコメントの中にも、これからやらなあかんと思うことがたくさんあったように思います。もっと当事者、本当のところご家族のこととかね、死を直前にされている、も

しくは死を考えて悩んでいらっしやるとか、そういった方々を交えた議論ってどのように作ればいいのかとか。もっと生、生きている生きづらさっていうのを真正面から議論するっていうことの役割ですよ。当然それはミウラさんおっしゃったように、社会の歪みとか社会の矛盾とか、そこのひとり一人との関係っていうものに行き着くでしょうし、それはやっぱり暮らしとか経済とか、生業とかっていうものにも関連するので、生きていること生、暮らしているものをもっと真正面から捉えた議論というのもあっていいのかもしれないなと思いました。

また、とはいえ迎える死というものがあるとするならば、死との向き合い、死への弔い、葬送、埋葬っていうのが、多文化共生の中で、いろいろと変わってきている。もしくは、核家族化とか孤立化っていう中で変わってきているとすれば、そういうものへの向き合い方、付き合い方を僕らも見出していかないといけないんだろうなと思います。それが何か分断にならないように。分断とか差別にならないように。

それから、今週私も報告を受けるんですけど、チャイルドデスレビューという子どもたちの死というもの。不慮の事故死もそうです。自死もそうです。虐待もそうなんですけど、そういうものの中から、より良い社会

を作っていくための、悲しいけれども、知恵を私たちが共有するっていうことを大事にしていきたいなと思いました。

また、自然。最後上田さんがおっしゃった、自然との関わり。それから、人間のことを中心に考えてきましたけど、やっぱり生き物。私、第1回の死生懇話会で言いましたけど、虫捕りとかいろんな動物とか、いろんな生き物との関係っていうのは、やはりこれからももっともっと大事にしていける滋賀県であつたらいいなと思っています。

そして、最後に。とはいえ、自然との関わりでいうとやっぱり災害とか。知りたくないけど死へ迫いやることに繋がる戦争とか。そういうものとの向き合い方も、死生懇話会をやってきた滋賀県だから、何かちょっとみんなの気持ちがわかる、もしくはそういった悲しい思いをする人たちのことも何か組み入れた施策っていうのができたらいいなということを常々感じています。第2弾の死生懇話会があつたときには、また委員になっていただくことや、ご参加いただくことをお願いするかもしれませんので、そのときはぜひまたご協力いただきますようお願い申し上げます。そして、とはいえインタビュー受けていただいた方、今日愛のメッセージをお寄せいただいた藤井さんを始め、こうして委員としてご参画いただき、本当に大切なお言葉を

一つ一つ紡ぎながら、お寄せいただいた方に感謝申し上げて、私のコメントとさせていただきます。ありがとうございました。

○上田 洋平さん

ありがとうございます。ということでですね、先ほどミウラさんが何者かになれない、何かができない、そういうことに苛まれる子どもたちの話もされましたが、人間の価値というか人間っていうのはいる、する、なると考えたときにですね、まさにこの懇話会っていうのは人間の最も根源的な価値、そこにみんながいるということ。存在を承認しあって、そしてともに何をするかということ、するもなるもあるけれども、その前に、いるじゃないか、ということ、みんなが都合を合わせて、調子を合わせて、渋滞の中でも駆けつけていただきながら、居合わせる場を作った。この居合わせから仕合わせが生まれることを祈念をいたしまして、マイクをお返ししたいと思います。

毎度進行が下手くそで皆さんに十分喋っていただけず、またちょっと超過しておりますが、さっき指名がありましたから、最後、山田さんと森さんから一言言って閉じたいと思います。

まずは、この委員の皆さんと知事に拍手をお送りいただきたいと思います。(拍手)

今日ご参加の皆さんもありがとうございました。では、事務局にお返しします。

○事務局(滋賀県企画調整課 森)

ありがとうございます。企画調整課の森と申します。本来、県職員は裏方なんです、僭越ながら一言お話しさせていただきます。

死生懇話会、最初どうしていくのということから始まったんですが、いろいろあって本当に一番感じたことは、この死生懇話会の意義は関わった皆さん、参加してくださった皆さんが教えてくれるなというふうに思いました。死とか生について、語りたいなと思っておられる方は意外といらっしゃるんですけども、どこが主催されているイベントかわからないと、ちょっとやっぱり何か売りつけられるんじゃないとか、勧誘されるんじゃないかということがあるけど、役所がやっているってということで安心して参加できましたと言っていたことがたくさんありました。何も売りつけないと言いながら、本を買ってくださいと言っているのが非常に心苦しくはございますが、もし関心がありましたらお願いいたします。

死生懇話会、雑貨屋のイメージを持って私はやってきたところです。積み残したものとしては、雑貨屋としてはまだまだ品数が少

ないかなというふうに思っているところもございまして、引き続き何がいいのかなというのを考えてやっていきたいと思っております。本当にありがとうございます。

○事務局(滋賀県企画調整課 山田)

はい、ありがとうございます。今お話ししました森から途中で担当を引き継ぎました、山田と申します。

私は、割と県庁の中で若手の職員だったんですけども、死生懇話会を担当するにあたって、最初はすごい否定的というか、何て言うんでしょう…知事がカッコいいことを言っただけのもんかなって正直思っていました。知事と同じ部屋でお話する機会があったんですけども、そのときの第一声が「山田さんいくや？」って言われまして、「私は28歳です。」と答えたら、「何歳まで生きるんや？」という会話を県庁の知事室の中でしたのをすごく覚えています。それまでは、県職員としてどういう事業をどういうふうに組み立てて、どういうスケジュールでやるかっていうことを上司と喋ってきましたけれども、そういうことを知事と初めて喋って、あとは自分のところの所属の人たちや所属外の人たち、またこういう県民の方とのサロンなんかもさせていただく中で、本当に県職員というスーツを脱いでお話しできる機

会っていうのをいただけたことをすごく良かったなと思っています。今日の皆さんの振り返りなんかを見て、私も当時こうやっていうのをすごい思い返しながら聞いていました。そういったことも本にいっぱい出てきますので、まだお読みになってない方はぜひ無理のない範囲でお買い求めいただければと思います。本日はありがとうございました。

最後、事務局からのお知らせです。

オンラインでご聴講の方には事前のメールで、会場でご聴講の方にはお手元にアンケート用紙を配布しております。今日の感想などいろいろあるかと思っておりますので、書いていただき、一番後ろの扉のところにありますアンケート回収ボックスに置いて帰っていただければと思います。また、マジックペンも机に置いていましたけれど、それはそのまま置いて帰っていただければと思います。

また、先ほど来年度は死生懇話会という座組では実施しないという話がありましたけれども、形を変えながら、こういった根源的なことを語る場について考えていきたいと思っていますので、またご参加いただければと思います。

本日はありがとうございました。気をつけてお帰りください。(拍手)

ありがとうございました。

〔17時00分 閉会〕

